生成変化はなぜ可能なのか：アリストテレス『自然学』1巻8章

東京大学　杉本英太

アリストテレスは『自然学』1巻において，二度，エレア派批判を行う．彼は第一に「あるもの（τὸ ὄν）は一つである」という主張を論駁し（2-3章），第二に「生成は不可能である」という逆説を解消する（8章）．

これら二つの議論は，「自然的事物の原理」の数と本性との探究に捧げられる中核的論述の区域を画するように位置する．アリストテレスによれば，「あるものが一つであり不動であるかどうかの探究は，自然について論じることではない」（184b25-185a1）(1)．しかしエレア派は「自然に関する困難」を語っており，「そのことの考察は哲学的である」以上，この主題もまた論じるに値する，と語られる（185a17-20）．自然学は，動植物から諸元素に至る多様な諸事物の運動変化を伴う諸相を扱う学問である．万物の多数性と生成変化の可能性を拒否するエレア派の議論は，この学問の存立を根底から脅かすゆえに，予め明確に批判される必要があった．かくして，エレア派批判の第一の論証は原理の数を問う哲学史的論述の冒頭に配置され，第二の論証は7章で生成変化の分析枠組みを確立した後に行われる．

本稿の目標は，特に第二の論証，すなわち8章における生成変化の可能性の擁護について，その論証構造と同巻中の位置づけ，および議論の性格を解明することである．実のところ，8章の論証の解釈は研究者の間で未だ定まっていない．論証本体のみならず，最初に定式化されるエレア派（就中パルメニデス）の問題提起の解釈さえ争われている．そして本稿の見るところ，現行の主要諸解釈はいずれも議論の構成をよく捉えていない．その原因は，8章の論証がそれ以前の議論を前提する仕方が，充分に注意されてこなかった点にある．本稿は特に3章・7章との関連に着目し，両章が生成変化の可能性を開く必要充分な諸前提を与えていると論じる．

以上諸点の解明を通じて，8章の議論のもつ性格も自ずと明らかになろう．本稿では，同章の論証が，自然学の全くの枠外からその「論理的」基礎を固めるものである――すなわち，所謂『オルガノン』に属する抽象的な道具立てのみを用いて構築された，言語の形式の観察に基づく，予備的・主題中立的な議論である――と主張する(2)．

1．諸問題

8章冒頭の検討から始めよう．

次に,古の人々のアポリアもただ一通りにこの仕方で解決されると,我々は論じよう．というのも，哲学に関して最初である人々は，ある̇ものどもの真理と本性とを探究していたとき，いわば経験不足ゆえに或る別の道へと押しやられ，脇に逸れたのだ．そして彼らが主張するには,「必然的に，生成するものはある̇ものないしあら̇ぬ̇ものから生じる一方，それらのどちらからも不可能であるため，ある̇ものどもは何一つ生成も消滅もしない．というのも，ある̇ものは生じないし（既にあるから），あら̇ぬ̇ものからは何も生じない(何かが基礎に置かれるべきだから)」.そして，まさにこうして直ちに帰結することを誇張して,「多なるものはありはせず，ある̇もの自体のみがある」と彼らは主張する．(191a24-33)

初めに三点注記する．まず「古の人々のアポリア（ἡ τῶν ἀρχαίων ἀπορία)」とはパルメニデスによる生成消滅否定の逆説である(3)．次に「ただ一通りにこの仕方で（μοναχῶς οὕτω)」という指示表現は直前の 7 章を指示する．つまり同章の生成分析が唯一の解決策を与えるとされる．第三に，この逆説を「誇張して」導かれる所謂一元論は，既に 2-3 章で批判されている．それより弱い生成否定論の論駁を本章は企図する．

まず，論争の余地のない範囲で，議論の概要を示そう．パルメニデスの逆説は，ここでジレンマの形に定式化されている．

1. 何かが生じるなら，(i) ある̇ものから（ἐξ ὄντος）生じるか，(ii) あら̇ぬ̇ものから（ἐκ μὴ ὄντος）生じるかのいずれかである．
2. ある̇ものは生じない（(i) の否定）．なぜなら，既にあるから（εἶναι γὰρ ἤδη)．
3. あら̇ぬ̇ものからは生じない（(ii) の否定）．なぜなら，何かが基礎に置かれるべきだから（ὑποκεῖσθαι γάρ τι δεῖν)．
4. 1-3 より，何ものも生じえない．

これに対するアリストテレスの応答は，「ある̇ものからの生成」「あら̇ぬ̇ものからの生成」は両義的だ，というものだ（191b13ff.)．すなわち両者の各々に「端的に（ἁπλῶς）生じる」「付帯的に（κατὰ συμβεβηκός）生じる」の二義がある．

彼は具体例を用いてアイデアを説明する（191a34ff.)．すなわち，「医者が

家を建てること」と「医者が医術をなすこと」は性質を異にする．医者は「医者として（ᾗ ἰατρός）」医術をなすが，「医者として」家を建てるのではない．同様に，「医者として」医者ではなくなるのだが，「医者として」色白くなるのではない．むしろ「色黒である限りで（ᾗ μέλας）」色白くなるのだ．「X から端的に生じる」とは「X としての X から生じる」を意味する．そうでない生成は付帯的である．

そして，アリストテレス曰く，あるもの・あらぬものからの端的な生成があり得ない限りでパルメニデスは正しい．しかし付帯的な生成は可能である．ゆえに逆説は成立しない．

大略以上の通りであるが，内実の理解にはなお敷衍を要する．そして敷衍の仕方に争いがある．解釈上の第一の問題は，「生じる」「ある」と訳した動詞 γίγνεσθαι, εἶναι の統語論的多義性から生じる．具体的には，補語を取らず「S が生じる」「S がある」となるか（以下，完全用法と呼ぶ），補語を取り「S が P になる」「S は P である」を意味しうる（不完全用法）．ジレンマ内の語句をどちらで取るかが問題になる．

「ある」の優勢解釈は前者であり，この場合多くは「実在する（exist）」と同義とされる．現在の代表的論者は Clarke（2015）である(4)．他方，不完全用法を採る論者としては Kelsey（2006），Anagnostopoulos（2013）が挙げられる(5)．Kelsey は「ある」を「実体である」の意味に解し，Anagnostopoulos は「（属性）P である」の意味に解する．「生じる」の理解もこれと連動しており，Clarke が完全用法で解するのに対し，Kelsey および Anagnostopoulos は不完全用法を前提する(6)．

また第二に，「端的・付帯的」がジレンマに関して結局いかなる区別であるかが，これと連動して問われる．Kelsey（2006: 341-7）は，実体の生成の始点すなわち「実体素材」（substance-material）が，実体・非実体である限りで（insofar as）実体・非実体であるのか否かの区別だと考える．Anagnostopoulos（2013: 249）は，P であること・ないことが生成において明確な因果的役割（distinct causal roles）を果たすか否かの区別とみなす．Clarke（2015: 141-4）は，生成の起点にあるものの実在・非実在によって（by virtue of）何かが生じているか否かの区別だとする．

以上が主要な争点であり，これらへの回答を本稿は目指す．しかし加えてなお二点解明すべきことがある．すなわち第三に，「何かが基礎に置かれるべきだ」ということが何を意味するのか．これはしばしば，生成変化を通じて存続する基体・質料の要請と解釈されてきた(7)．だが，そうした自然学理論の負荷の掛かった概念がパルメニデスの議論の定式化に用いられてよいか，

懸念を残す．第四に，本章の問題解決は具体的に 7 章の議論の何をどう応用しているのか．注意すべきは，幾人かの論者の示唆にも拘らず(8),「何かが基礎に置かれるべき」ことは，問題の解決ではなく，まずは問題そのものであることだ．解決には別の論拠が必要である．

本稿は，最後の点の考察を糸口として，第一から第三の問題の全てに一義的解決を与えうると論じる．したがって，まずは 7 章のテクストを検討したい．

2．二つのテーゼ

2.1.　生成一般の構造分析

『自然学』1 巻 7 章はアリストテレスが自らの原理論を確立する箇所である．大きく二部に分かれ，前半部（189b30-190b17）は日常言語の分析を通じて生成一般の構造を析出し，後半部（190b17-191a22）はそれを踏まえて自然的事物の原理の数と本性について結論を下している．このうち 8 章に第一義的に関連するのは前半部の議論であると思われる．問題は自然的事物のみならず，事物全般の生成変化の可能性だからだ．

では，その前半部は何を語っているのか．結論から言えば，本稿は Kelsey (2008) に従い，前半部の議論は次の二つのテーゼに集約されると考える．

(T1) 生成するものは，基礎に置かれるもの（τὸ ὑποκείμενον）である．
(T2) 基礎に置かれるものは形相の点で（εἴδει）一つではない．

ここで「基礎に置かれるもの」とは，Kelsey (2008: 202) によれば，「述定の究極的主項」を意味する．つまり，S には P が述定されるが，S はそれ以上何にも述定されないような，その S を指す．この規定にはカテゴリー論的な実体の含意はありうるにせよ，「存続する基体」の含意はない．（この解釈はしかし論争的ではあり，後者の意味を読み込む解釈がなお大勢を占める(9)．）

他方「形相の点で」(191a16) という表現は，一見して質料形相論的な言葉遣いに見える．しかしこれは直ちに「説明規定の点で（λόγῳ）」(ibid.) ――すなわち，事物のあり方を示す述語に関して――と言い換えられ，言語的な水準の特徴づけに還元される．例えば教養ある人間は「説明規定の点で」二つだとされる（「教養ある」「人間である」）．

もっとも，前半部の論点が以上二点に尽きることの検証は，本稿の手に余

る．また 8 章の論証の前提を探求する上で必要な作業でもない．むしろ，より少ない前提をもとに 8 章の議論を再構築できれば，それはより効果的な議論となるだろう．必要なのは，我々が述べる意味で二つのテーゼが現に確立されていると示すことだ．Kelsey はこれを主として 5-6 章との関連から論証するが，以下では専ら 7 章の読解に基づき我々の解釈を擁護したい．

生成の構造分析は，生成を語る我々の言語実践の分析から始まる．アリストテレスは，無教養な人が教養を身につける生成変化を例に取り，以下の諸観察を行う（189b32-190a13）．

1. 生成事象には二つの表現形式がありうる：「X が Y になる（X Y γιγνεσθαι）」「X から Y になる（ἐκ X Y γιγνεσθαι）」．（以下，各々を「ガ形式」「カラ形式」と呼ぶ．）
2. X, Y は単純か複合的かのいずれかである．例えば「人」「教養なきもの」は単純であり，「教養なき人」は複合的である．
3. カラ形式の用法は限られる．例えば「人から教養あるものになる」とは言わない．
4. 生成するものには留まるものと留まらないものとがある．「人」は留まるが，「無教養なもの」「無教養な人」は留まらない．（「留まるもの」は後に「対立しないもの」とも言い換えられる．）

ここから，生成全般について（T1）「つねに何らかのもの，つまり生成するものが基礎に置かれている必要があること」，および(T2)「それは数の点では一つであるとしても，少なくとも形相の点では一つではないこと」が結論される（190a14-16）．

結論に至る思考の道筋は次のように辿りうる[10]．（観察 1）ガ形式とカラ形式の区別は，「X なる主体が何かに変化する」「対立する X と Y の間で変化する」という生成変化の二側面に対応する．（観察 3）実際 X と Y が論理的に両立する場合にはカラ形式は使えない．また後にはカラ形式が「留まらないものについて一層よく語られる」とされる（190a21-23）．他方，ガ形式の始点 X と終端 Y への制約が示されていないことは，ガ形式の汎用性を示唆する[11]．始点 X はまずは生成主体なのだ．ただし X が「無教養」のような属性であっても，生成主体「教養なきもの」は人という或る実体（＝述定 X の究極的主項）である（観察 2 から示唆される）．これが T1 の意味である．

そして「基礎に置かれる」人が教養なき人である以上，一個同一のこの人も，「対立しない・留まる」（つまり生成の終端と両立し，その限りで存続す

る）側面と，そうでない側面とをもつ．ゆえに基礎に置かれるものは形相・説明規定の点では一つではない．これが T2 である．

まとめると，(T1) 生成の始点は実体である生成主体であり，(T2) その主体は数的には同一だが，生成結果との両立可能性により区別される複数の説明規定をもつ．

なおアリストテレスによれば，実体が「端的に生じる」場合も（これは 7 章の文脈では補語なしに「S が生じる」と言われる場合を指す），同様に「基礎に置かれるもの R から生じる」と分析できる（190a31-b10）．この主張は二段階の形式変換に基づくと思われる．すなわち第一に「S が端的に生じる」場合も「R から S が生じる」と補え，第二にこの形式は先ほどの議論から「R が S になる」に還元できる(12)．この意味で，端的な生成であれ，結局その始点に基礎に置かれるものがある（T1）．

繰り返しになるが，かく理解された二つのテーゼは，実在のありようにコミットしているという広い意味においては形而上学的であるにせよ，なお冒頭で述べられた意味で「論理的」水準にある（すなわち，言語構造の考察に基づき抽象的次元で提出されている）ことに留意すべきである．この点で Bostock（1982: 182-183）が，この議論は自然学的探究というよりは生成変化の説明が有するべき一般形式のメタ探究（meta-investigation）である，と評したのにも一理あろう(13)．

2.2 二つのテーゼの応用

そして，まさに上記のテーゼが 8 章で応用される，と本稿は主張する．まずは同章のジレンマを再確認しよう．

1. ある ものから ある ものは生じない．既にあるから．
2. あらぬ ものから ある ものは生じない．何かが基礎に置かれるべきだから．

今や我々はこの意味をより良く理解できる．テーゼ T1 が成立するのは，まずはカラ形式をガ形式に変換しうるためであった．「あらぬ ものからは生じない」理由は，「あらぬ ものが X になる」ことの不可能性にある．それは何も生成主体でないと言うことに等しい．このようにして，パルメニデスは T1 を受け入れている．（加えて，カラ形式が対立をマークすることを念頭に置けば，ある もの側の角もより容易に了解されよう．）

この解釈の利点は，「基礎に置かれる」に「存続する基体・質料」を読み込

む解釈に比べ，アリストテレス的前提がパルメニデスに不当に帰されていると憂慮せずに済むことである(14)．手短な言語分析に基づく T1 の措定は，ほんの小さな前提にすぎない(15)．

しかしこの措定は，アリストテレスにとっては重要な一手である．テーゼ T2 適用の布石となるからである(16)．すなわち，およそ基礎に置かれるものの説明規定は複数ありえ，ある・あらぬものも例外ではない．

> かの人々〔=古の人々〕は区別しなかったために道を外れたのであり，この無知ゆえに，同時に次のことにも無知であった．すなわち，他のものどもは何一つ生じるともあるとも考えず，むしろ全ての生成を破棄するほどだったのだ．(191b10-13)

したがって，あるものやあらぬものを説明規定の点で区別しうることが，生成変化一般の可能性を開く鍵となるのだ．

だが，と問われるかもしれない．そのような事実にいかなる意義があるのか．存在者に複数の説明規定が属することは，自明の事柄ではないか．この常識的な問いに答えるには，再び議論を，今度は 2-3 章へと遡る必要がある．

3．あるものの説明規定一元論

既に見たように，アリストテレスは，原理論の展開に先立ってエレア派の一元論を予備的に検討している．彼は 2 章で一元論の「一」の意味を三分類する．すなわち「(a) 連続的なもの，(b) 分割不可能なもの，(c) それらに同一の説明規定，つまりそれらの本質の説明規定があるもの，が一つだと語られる」(185b7-9)．このうち 8 章の論旨に関わるのは (c) 単一の説明規定を有するという意味の「一つ」である．この意味でのあるものの単一性の主張を「説明規定一元論」と呼ぼう(17)．それに対する彼の反論を，3 章から引用する．

> パルメニデスに対しても，他の論法は固有であるにせよ，同じ論法が成り立つ．そして論駁は，一方で〔前提が〕虚偽である，他方で〔帰結が〕結論されえない，という仕方でなされる．虚偽であるのは，あるものが一通りに語られると（〔本当は〕多様に語られるのに）前提する限りにおいてであり，結論されえないのは，白いものどものみが前提され，「白い

もの」が一つを意味表示するとしても，やはり多くの白いものがあり，それらは一つではないからだ．というのも，連続性の点でも，説明規定の点でも，白いものは一つではないだろうから．というのも，白いものにとってのあることと，〔白さを〕受容しているものにとってのあることは異なるだろうから．そして，白いものの他には何も離在しないだろう．というのも，離在する限りで，ではなく，むしろあることの点で，白いものとそれが属するものとは異なるのだから．だがこのことを，パルメニデスはまだ理解していなかった．(186a22-32)

ここでもアリストテレスは具体物との類比を用いる．「「白いもの」が一つを意味表示する（σημαίνοντος ἓν τοῦ λευκοῦ）」の解釈は分かれるが，本稿は「「白いもの」は数的に一つのものを指す」の意味に理解する(18)．例えば色白い人は色白くもあり人でもあるが，しかしあくまで単一個体である．「白いものの他に何も離在しない（οὐθὲν χωριστόν）だろう」という一文は，数的同一性と説明規定の多数性が両立することを端的に示す．また白いものの単一性は，それが数ある白いものどもの一つであることも排除しない．仮に世界に白いものしかなくとも，それらは依然他の種々の述定（人，雲，石灰……）を容れうる．あるものも全く同様に，仮に数的に一つであっても，同時に他の述定を容れうる．したがって，説明規定一元論は帰結しない．

すると，パルメニデスの議論は誤謬推論に過ぎないのか．そうではない，とアリストテレスは診断する．むしろ隠れた前提がある．パルメニデスは，「あるものが一つを意味表示し，それに〔「ある」が〕述定されうると捉えていたのみならず，あるものがまさにあるもの・まさに一つのものを意味表示するとも捉えていたに違いない」(186a32-34)．この「まさにあるもの」(ὅπερ ὄν）とは，あるということのみをその本質とするもののことだと考えられる(19)．これが冒頭の「あるものが一通りに語られる（ἁπλῶς τὸ ὂν λέγεσθαι)」という前提の意味である．

これに対するアリストテレスの応答は，そうしたまさにあるものは述語とも述定対象ともなりえない，というものだ．一方で，まさにあるものは他のものSの述語となりえない．Sはまさにあるものとは異なる以上，あるものではない．仮定より，あるものとは，まさにあるものだからだ．だが「全くあらぬものがまさにあるものである」と言うことは不可能である（186a32-b4)．他方，まさにあるものに他の述語Pを述定することもできない．同じ理由でPも全くあらぬものだからだ（186b4-14)．

したがって，パルメニデスの主張のもつ帰結は「奇妙（ἄτοπον)」(187a8)である.「というのも，まさにあるものが何かであるとするのでなければ，あるもの自体を誰が学びうるだろうか」(187a8-9)[20]．ここに至って彼の教説は，その根本的な了解不可能性の点で批判される．事物を理解するには，それを主述関係のうちに置く必要がある．これは殆ど思考可能な最小限の要請だろう．しかしこれさえ認めれば，あるものが複数の説明規定を有することを妨げる事情はもはやない.

4．8 章の論証構造と論証の性格

得られた材料を整理しよう.本稿は 7 章の二つの主要テーゼ,すなわち(T1)基礎に置かれるものの措定と(T2) 説明規定におけるその多数性とが，8 章の論証の鍵だと論じた．T1 をパルメニデスが受け入れることで，争点は「基礎に置かれる」あるもの・あらぬものの性質如何という一点に絞られる．これらにテーゼ T2 が妥当するかどうか．まさにこの点でアリストテレスとパルメニデスは最も鋭く対立する.パルメニデスがあるものを「分割しなかった」のは，白い，人であるなどと語りえないまさにあるものを想定したからだ．他方アリストテレスによれば，あるものは，白い，人である，要するにつねに「何かである」.そしてこれは事物の認識可能性に関わるミニマルな要請の帰結である.

さて，1 節で挙げた 8 章解釈に関する諸問題のうち，最初の二つが論じ残されている．第一に「生じる」「ある」，第二に「端的」「付帯的」をどう理解すべきか.

まず「生じる」については，7 章前半の統語論的分析をもって解答としてよいだろう.他方「ある」については，二人の間で見方が異なるはずである．パルメニデスのあるもの・あらぬものは，まさにあるもの・全くあらぬものである．完全用法でしか言明しえない「ある」を彼は語っている．他方，アリストテレスのあるものは，完全用法の端的な「ある」を述定しうると同時に，不完全用法の，付帯的な何かであるものでもある.

一方で，アリストテレスの端的な「ある」と付帯的な「ある」の区別は，いわば観点ないし強調点の違いにすぎない．例えば或る人間を「あるものとしてのあるもの」の一例とみなすこともできるが，その時その人は，図式的に言えば，人であるものである．他方この人を，単にあるものとしてではなく，人であるものとして見ることもできる．統語論的に区別される二種類の「ある」は，意味においては連続している[21]．したがって，端的にあるもの

さえ，パルメニデスの「まさにあるもの」と類同的ではない．

他方，「あらぬ」については，やや事情が異なる．人であらぬものは端的にあらぬものではないからだ．それはやはり何かであるもの，例えば馬である．この限りで，アリストテレスの端的にあらぬものは，パルメニデスのそれと合致する．「「あらぬものから生成する」も「あらぬ限りで」を意味表示することは明らかである」(191b9-10, cf. 191b25-6) という一文は，この合致を述べていると考えられる．実際アリストテレスは，「あるものから」が「ある限りで」を意味表示するとは語らない．両者の非対称性は適切に留意されていると言える．

以上の解釈は，近年提出された諸解釈とは異なる[22]．冒頭で見た Kelsey (2006), Anagnostopoulos (2013), Clarke (2015) の解釈は，いずれもジレンマとその解決における「ある」の同義性を前提するからだ．文脈上この前提は疑わしい．また特に Anagnostopoulos の述定解釈は，およそ『自然学』のパルメニデスに帰し難い「ある」理解をジレンマに帰しているように見える．

以下では，本稿の解釈が実際に 8 章のテクストに即していることを，他解釈の批判とともに示したい．ジレンマを具体的に解決する箇所 (191b13-27) を順に見てゆくことにしよう．

> 他方の我々自身も，何ものも端的にあらぬものからは生じないと主張するが，しかし或る仕方では，つまり付帯的には，あらぬものから生じると主張する．（というのも，〔さもなければ〕それ自体としてあらぬ欠如から，欠如が内属せずに，何かが生じるから．これは驚きであり，このようにあらぬものから何かが生じることは不可能に思われる．）(191b13-17)

まず，あらぬものからの生成が検討される．最初の一文は，「全くあらぬものからは生じないが，X であらぬものからは生じる」という意味である．括弧内の議論は一種の反実仮想として理解できる[23]．アリストテレスの枠組みでは，欠如は「付帯的にあらぬ」ものである．仮に欠如が「それ自体として」端的にあらぬものなら，それはおよそ基礎に置かれるものではなく，他の基礎に置かれるものにも内属しない．ゆえにテーゼ T1 に違反する．

この箇所は Clarke らの実在解釈に不利である．実在解釈によれば，あらぬものからの生成は，付帯的な場合にも，無からの生成となる．だがそうすると，生成が付帯的であることが問題解決に寄与しうるか，疑わしい．「基礎

に置かれるもの」が存続するとしても，欠如を独立の非存在者とみなす限り，問題は残るだろう(24).

Kelsey の実体解釈にも同様の困難がある．実体解釈に基づけば，ここでは実体であらぬものからの付帯的生成が許されることになるが，非実体から実体が生成することは不可能だからだ．そこで Kelsey (2006: 340ff.) は，付帯的生成を，「特定の種類の実体であらぬものから」の場合として理解する．だが，「あらぬものから」というだけの文言にこのような意味を読み込みうるテクスト上の根拠は乏しい．要するに，両解釈とも，いわば「ある」に固定的な実質を与えた結果，あらぬものに関する解決の理解に行き詰まっているように思われる．

続いてアリストテレスは，あるものからの生成を検討する．

> 同様にして，付帯的にでなければ，あるものから生じることも，あるものが生じることもないと我々は主張する．そのように〔付帯的に〕あるものも生じるのは，ちょうど，動物から動物が，また或る動物から或る動物が，生じるのと同じ仕方である．例えば犬が馬から生じるとすれば〔そうであるように〕．というのも，犬は或る動物からのみならず動物からも生じる一方，動物として生じるのではないだろうから．というのも，動物は既に〔馬に〕属しているから．
>
> もし何かが付帯的でない仕方で動物になるだろうとすれば，動物からありはしないだろうし，何かが〔付帯的でない仕方で〕あるもの〔になるだろうとすれば〕，あるものからあることはないだろうから．そしてあらぬものからあるのでもない．というのも，「あらぬものから」は「あらぬ限りで」を意味表示すると我々は述べたから．さらに，全てがあるかあらぬかであることも，我々は棄却しない．(191b17-27)

「ある」という観点から見られたあるものが始点・終端に置かれることはありえないが，P であるものから Q であるものが生じることには問題がない．かくしてあるもの側の困難も解消される．「馬から犬が生じる」事例は奇妙ではあるが，上記の理路とは整合する．犬も馬も動物であるように，P であるものも Q であるものもあるものである．だが生成を語るには犬や馬，P や Q への分節を要する．

以上見た通り，本稿の読みに基づけば，ジレンマの解決は無理なく理解できる．それにも拘らずこの読みが採られてこなかったのは，一つには恐らく，

ある ものに複数の説明規定が属しうることの見かけ上の自明性ゆえに，哲学的興味の乏しい解釈だと考えられてきたからではないか，と推測される．だが，パルメニデスとアリストテレスの対立点が一旦把握されれば，この自明性の見かけが偽りであり，むしろ「ある」の意味にこそ全てが懸かっていたのだと了解されよう．

最後に，8 章の論証のもつ性格について考察したい．論証構成に必要な素材は，テーゼ T2 の措定，および T2 のある ものへの適用可能性を示す予備論証，および T2 を準備する T1 の措定であり，かつこれらで充分であった．注目すべきは，これらがいずれも言語形式の観察から導かれる抽象的・非時間的なテーゼであり，したがって自然学の全く枠外に位置することである．8 章における生成変化の可能性の論証は，この意味で専ら「論理的」である(25)．

そして我々はこれを正当な方法であったと評価できる．現象を否定するパルメニデスに抗して自然学の存立可能性を弁証するには，自然学的前提を予め置くことなしに，いわばその下層の論理的基礎を固める必要があるのだ．冒頭に引用したごとく「自然について論じることではない」この探究は，しかし我々が自然について論じる権利そのものを確保する試みである．そしてそれは疑いなく「哲学的である」探究であった．

注

（1）訳文は拙訳である．訳出にあたり内山（2017）ほか先行諸訳を参考にした．テクストは Ross（1936）を用い，引用個所は Bekker 版の頁行数で示す．〔 〕内は本稿の補いである．

（2）アリストテレスの一部の議論に対する「論理的（logical)」という特徴づけに関して，本稿は Burnyeat (2001) に依拠する．また cf. 千葉（2002)．

（3）「古の人々」は広義にはエレア派やその追随者たちを指すだろうが，パルメニデスその人の議論が第一に念頭に置かれていることは内容・語法上明らかである．(対立見解として cf. 金子（2004: 139n16)．)

（4）その他 Charlton（1970)，千葉（1982)，Loux（1992)．また特に Leunissen (2019) は明示的に Clarke に従う．

（5）その他 Ross（1936)．Bodnár（2018: 220-1）は折衷的な立場を示す．Kelsey (2006) も「実体である」と完全用法の「ある」との連絡を示唆してはいる．

（6）ただし Loux (1992) は γιγνεσθαι を不完全用法で読む．

（7）Cf. Ross（1936: 346)，Charlton（1970: 80)，金子（2004)，渡辺

(2012: 161ff.), Clarke (2015), Bodnár (2018), Leunissen (2019).

（8）Cf. Charlton (1970: 80), Bodnár (2018: 211n7). 他方 Kelsey (2008: 201) はこれを明示的に批判する.

（9）Jones (1974), Henry (2015) は Kelsey と同様の解釈を擁護する.

（10）Charles (2018: 181f.) が特に明確にするように，この箇所が用いるのは一種の発見的手続きであり，必ずしも帰納的・演繹的推論ではない.

（11）この解釈のネックとなりうるのは,「我々は青銅から鋳像が生成すると言い，青銅が鋳像になるとは言わない」(190a25-6)という一文である.「青銅が鋳像になる」という表現自体は自然に見えるため，この一節は解釈者たちを悩ませてきた．だが，Morison (2019: 250) に従い,「時には（ἐνίοτε)」(190a24) 我々はカラ形式を選択するというだけの意味に取るなら，ガ形式の変則的な禁止を読み取る必要はなくなるだろう.

（12）Cf. 今井（2001:34-7).

（13）ただし 1 巻後半部の議論全体をメタ探究とする Bostock の見解には必ずしも賛同できない．7 章後半部を含め，専ら自然的事物の生成変化を論じる箇所は，本稿の扱う箇所とはやや水準が異なる.

（14）Cf. Loux (1992: 285), Horstschäfer (1998: 393).

（15）むろん「基礎に置かれるもの」は依然アリストテレス的語法ではあるが,「述定の究極的主項」という規定自体は彼の理論をさほど深く前提しない．いずれにせよ，本解釈は相対的により穏健である.

（16）なお既に Horstschäfer (1998: 382) が T2 の関連性を指摘している.

（17）文脈はやや異なるが，Clarke (2018) の造語 ‘essence monism’ から着想を得た.

（18）Cf. Quarantotto (2019: 97). 別解釈として Ross (2019: 473), Castelli (2019: 87-91).

（19）Cf. Castelli (2018: 93). 別解釈として Charlton (1970: 60), Quarantotto (2019: 109).

（20）これはパルメニデスの歌う女神からの学びへの引喩とも読める. Cf. DK28B1.28-32. 事実, 女神の説得さえ, 結局はあるものへの（不生・不滅といった）述定の形を取る他ない.

（21）換言すれば，端的な「ある」も述定用法と隔絶した「実在」を意味しない（Cf. Kahn (1976), Brown (2003), Burnyeat (2003)). 類比項の「医者」が一義的である以上「ある」も両義的ではあり得ない,

という Anagnostopoulos (2013: 262) の議論は，それゆえ本稿には的中しない．

（22）ただし Wieland (1962: 137f.) が同様の解釈方針を粗描している．

（23）一般的な解釈と異なり，括弧内の ‘γάρ’ (191b15) に「さもなければ」（始点が端的にあらぬとすれば）の意味を読み込む．Cf. Denniston (1950: 62f.)．もっとも，通常の解釈を採用しても，解釈の大筋には差し支えない．

（24）Cf. Waterlow (1982: 20f.).

（25）末尾における「可能態・現実態」概念を用いた論証方式への言及は (191b27-29)，あくまで補足的文言にすぎないと思われる．（対立見解として cf. 渡辺 (2012: 168ff.).）

文献表

Anagnostopoulos, A., 2013, “Aristotle’s Parmenidean Dilemma”, *Archiv für Geschichte der Philosophie* 95, 245-274.

Bostock, D., 1982, “Aristotle on the Principles of Change in *Physics* I” in M. Schofield, M. Nussbaum (eds.) *Language and Logos*, Cambridge University Press, 179-196.

Bodnár, I., 2018, “*Physics* I.8” in Quarantotto (ed.) (2018), 206-225.

Brown, L., 2003, “The Verb “to be” in Greek Philosophy: Some Remarks” in *Companions to Ancient Thought 3*: Language, Cambridge University Press, 212-36.

Burnyeat, M., 2001, *A Map of Metaphysics Zeta*, Mathesis Publications.

———, 2003, “Apology 30B 2-4: Socrates, Money, and the Grammar of ΓΙΓΝΕΣΘΑΙ”, *The Journal of Hellenic Studies* 123, 1-25.

Castelli, L., 2018, “*Physics* I.3” in Quarantotto (ed.) (2018), 82-105.

Charles, D., 2018, “*Physics* I.7” in Quarantotto (ed.) (2018), 178-205.

Charlton, W., 1970, *Aristotle's* Physics *I and II*, Clarendon Press.

千葉恵，1982,「『自然学』A 巻における生成の問題：質料概念の形成をめぐって」，三田哲学会編『哲学』第 75 集．

———, 2002,『アリストテレスと形而上学の可能性：弁証術と自然哲学の相補的展開』，勁草書房．

Clarke, T., 2015, “Aristotle and the Ancient Puzzle about Coming to Be”, *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 49, 129-150.

———, 2018, “*Physics* I.2” in Quarantotto (ed.) (2018), 60-81.
Denniston, J. D., 1950, *The Greek Particles*, Clarendon Press.
Diels, H., Kranz, W., 1952, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, Bd. 1, Weidmannsche.
Henry, D., 2015, “Substantial Generation in *Physics* I.5-7” in M. Leunissen (ed.) *Aristotle's* Physics: A Critical Guide, Cambridge University Press.
Horstschäfer, T. M., 1998, *'Über Prinzipien'*: Eine Untersuchung zur methodischen und inhaltlichen Geschlossenheit des ersten Buches der Physik des Aristoteles, De Gruyter.
Ierodiakonou, K., Kalligas, P., Karasmanis, V. (eds.) (2019) *Aristotle's* Physics *Alpha*: Symposium Aristotelicum, Oxford University Press.
今井知正，2001,「自然学第一巻」『哲学雑誌』788 号，23-40.
金子善彦，2004,「生成の形而上学：パルメニデスとアリストテレスの対話」『思想』966 号，117-141.
Jones, B., 1974, “Aristotle's Introduction of Matter”, *Philosophical Review* 83, 474-500.
Kahn, C., 1976, “Why Existence Does Not Emerge as a Distinct Concept in Greek Philosophy”, *Archiv für Geschichte der Philosophie* 58, 323-34.
Kelsey, S., 2006, “Aristotle *Physics* I 8”, *Phronesis* 51, 330-361.
———, 2008, “The Place of I 7 in the Argument of *Physics* I”, *Phronesis* 53, 180-208.
Leunissen, M., 2019, “*Physics* I 8: The Route to Solving the Eleatic Puzzle” in Ierodiakonou et al. (eds.) (2019), 286-301.
Loux, M. J., 1992, “Aristotle and Parmenides: An Interpretation of *Physics* A8”, *Proceedings of the Boston Area Colloquium of Ancient Philosophy* 8, 281-319.
Morison, B., 2019, “*Physics* I 7, Part 1: The Complexity of the Subject in a Change” in Ierodiakonou et al. (eds.) (2019), 229-261.
Quarantotto, D. (ed.), 2018, *Aristotle's Physics Book I*: A Systematic Exploration, Cambridge University Press.
Quarantotto, D., 2019, “*Physics* I 3: Towards the Principles——Resolving the Eleatics' Arguments for Absolute Monism” in Ierodiakonou et al. (eds.) (2019), 88-123.
Ross, W. D., 1936, *Aristotle's* Physics, Clarendon Press.

内山勝利（訳），2017,『アリストテレス全集 4 自然学』，岩波書店.
渡辺邦夫，2012,『アリストテレス哲学における人間理解の研究』，東海大学出版会.
Waterlow, S., 1982, *Nature, Change and Agency in Aristotle's* Physics: A Philosophical Study, Clarendon Press.
Wieland, W., 1962, *Die aristotelische Physik*, Vandenhoeck & Ruprecht.